

# 経済ニュースから学び話題を豊富に ～日本とアジアの産業界はどう動いているのか～

兵庫県立洲本実業高等学校 校長 投石文子  
教諭 野口 遵

## 1. はじめに

本校は、機械科・電気科・商業科・国際ビジネス科の4学科があり、12クラス規模の学校である。昨年度からNIEの活動に参加している。国際ビジネス科3年生の選択授業で「日本とアジアの産業界はどう動いているのか」というテーマで経済ニュースを読ませる取り組みをしてきた。社会の動きを知っていること、その内容に一般常識程度の知識があること、これらは卒業後の職場でコミュニケーションを取るうえで欠かせないものとなる。卒業者の半数以上が就職する現状を考慮し、高校在学中に新聞を読むことを習慣化させたいと考えた。

## 2. 実践の概要

### (1) 新聞の掲示と整理

対象の生徒が授業で使用する教室の後ろに長机を並べ、そこに一週間分の新聞を置くようにした。このことで、教室を利用する全ての生徒がニュースを読める環境を整えた。

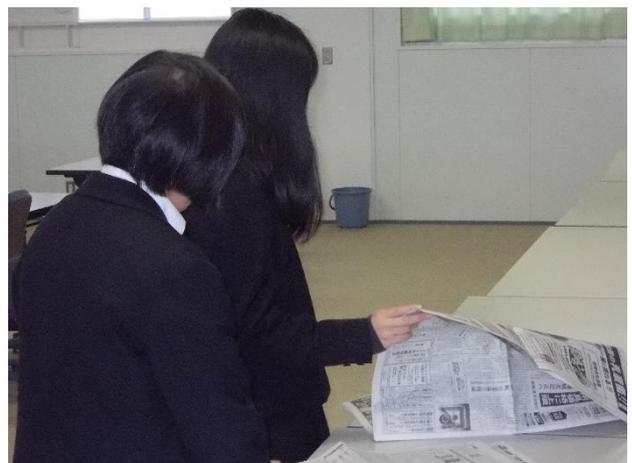


一週間が経過した後は、長机の横にあるロッカーに新聞各紙ごとに重ねておき、何か記事を探したい時にも対応出来るようにした。

### (2) 取り組み

約一ヶ月間を記事選びに当てた。生徒が興味を持つ記事がどれほどあるのか、どれくらいの頻度でニュースが出て来るのか、予測が難しい中一ヶ月という期間で区切って取り組んだ。

具体的には、生徒に対して「自分が興味を持った記事の一つを選び、それを皆の前で発表する形でニュースを伝えよう」と指示し、取り組みを始めた。



生徒が選んだテーマは、「セミセルフのレジやフルセルフのレジが登場」、「自動運転で宅配」、「日本製紙おむつが中国で人気」、「三菱

商事がローソンを子会社化」、「I  
o T」等であった。

## 生徒の活動と留意点

### 1 記事を読み、内容をまとめる

まとめた内容を教師がチェックしながら、次の「調べる」段階へ進むヒントを与えておく。

### 2 分からない箇所や関連内容を調べる

生徒がしっかりと理解できていない箇所、あいまいな箇所は詳しく調べさせる。そうすることで、関連内容に関する知識も広がる。



### 3 プレゼンテーション用ソフトウェアを使用してスライドにまとめる

的確な言葉を使い、図やグラフなど画像データを効果的に使用して、見やすく仕上げることを意識させる。この作業を通して、ソフトウェアの使い方とデータの活用にも慣れさせる。



### 4 発表する

聞き手の反応を見ながら話すこと、聞き取りやすい声の大きさと抑揚を心掛けさせる。

### 5 お互いの発表を相互評価する

お互いの発表を評価することで、自分自身の力量を伸ばせるように、お互いに学び取らせる。



各自が選んだ記事について、要点をまとめて提出させた。添削して生徒に返却する際は、個々に質問をして、生徒に対して次の段階として調べる内容を指示しておくようにした。課題の進み具合に合わせて、データの活用とかスライド作成におけるスキル面のことも

教えることにした。

まとめた内容と調べたデータによっては、ドキュメント内のリンクを入れるなどプレゼンテーションソフトの使い方も学習できた。

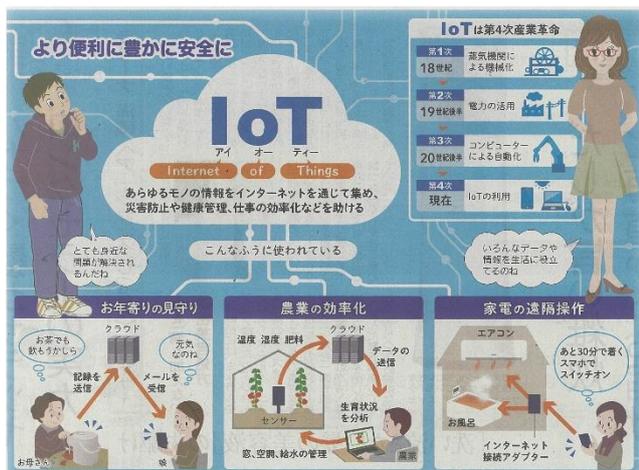
発表は5分以内とし、相互評価を行うことでお互いの発表から良い点を学び取る機会とした。

授業内での取組み例を紹介する。

### 学習計画（全5時間）

配当時間	学習活動	指導上の留意点
1時間	新聞記事の選択 記事の要点をまとめる 要点の添削	・共同作業ではなく、一人1テーマとする。 ・早くまとめ記入を出来た者から順に添削していく。
2時間	要点の添削 関連内容を調べる スライド作成	・発表時に、質問を受けても対応出来るように、関連知識も含めて幅広く知識を得させておく。 ・前回の反省点を改善できるように、スライドの作成にあたっては文字の大きさや色遣いに注意させて、見やすいものに仕上げさせる。
2時間	発表と相互評価	・各人5分以内での発表とする。 ・発表の良い点を評価シートに記述させる

### 生徒の作品（一部紹介）



### 作品A

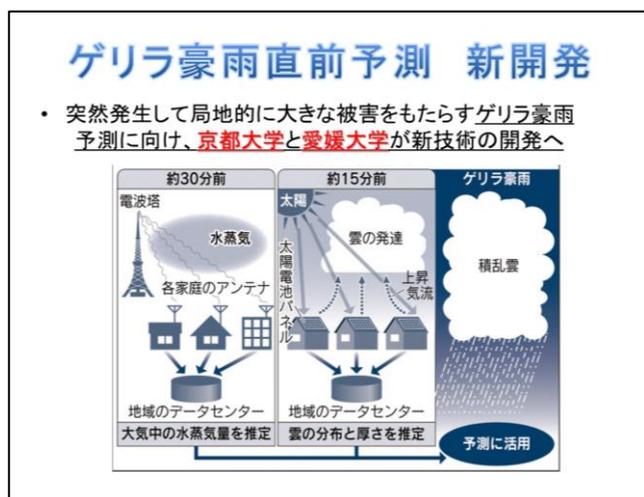
IoTとは、あらゆるモノの情報をインターネットを通じて集めることで、災害防止や健康管理、そして仕事の効率化などを助ける、というもの。

将来的には、高齢者の家庭も増えることから、ポットなど湯を沸かす電化製品をインターネットにつなぐことで、遠隔地に居る者が高齢者の生活情報をキャッチできるという話。

### 作品B

積乱雲をもたらす大気中の水蒸気量を、テレビ電波の到着時刻から見積もる技術を開発した。積乱雲が生じる前の水蒸気量を捉え、豪雨になる30分前に予測することが可能になる。

他にも、住宅や公共施設に設置された太陽電池パネルの発電量から、実際に発生した積乱雲の厚さと広がりを見積もる技術が開発された。



### 3. アンケート結果より

新聞購読に関する環境については、家庭で新聞を購読していない生徒が68%おり、これまでに新聞を読んだ経験については「あまり読まない」と「まったく読まない」を合わせて83%であった。ニュースなどの情報はスマートフォンやテレビから得ているという回答が90%に達している。新聞を読めば目的の情報以外にも幅広い内容を目にすることもできるが、スマートフォンなどインターネットを通じての場合には、意図的に限定された情報に限られる場合も多く、バランス良く幅広い知識を身につける点で問題点がある。

授業後のアンケートでは、「文章を読む力が身についた」「日本の企業とか産業界の動きを知ることが出来た」「内容をまとめる力がついた」などの感想が多くあった。新聞の必要性について、50%の生徒は「テレビやスマートフォンで十分」と考えており、「新聞も必要」と答えたのは約45%であった。

また、今後は「機会があれば、新聞を読むと思う」と答えた生徒が68%おり、これまではあまり新聞を読んでいなかった生徒も含めて、授業でのNIE活動に対しては肯定的な回答がほとんどであった。

### 4. 成果

これまでも、新聞各社の第1面にあるコラムを生徒に読ませてきた。短い文章で読みやすいこと、起承転結が明確で無駄のない展開で話がまとめられていて、文章を書く場合の手本にもなるからである。また、時事的なニュースや身近な話

題が多く取り上げられ、それに対する問題点や捉え方の参考にもなって、就職や進学での面接試験に対する備えとして活用もできる。この取り組みの延長線上としてNIE活動に結びついた。

インターネット上で情報を調べる場合は、単なるデータとして情報を得ることになり、関連情報は個々に調べることになる。しかし、新聞記事に出たもの場合は、記者が関連情報も含めて調べ済みで、一つの話として展開し情報がまとめられていることが多い。

実際に取り組んでみて、生徒が興味や関心を持つニュースの中身や質が異なってきたと感じている。過去の出来事を記したニュースだけでなく、将来に向けた動きが記事になっていることもあり、面接試験に対しての備えとしても深みを持たせることができた。さらに、これを機に生徒が新聞に目を向ける習慣が身につけば、社会人としてのコミュニケーション能力を高めることにもつながると考えられる。

また、教科書で学習した「近年アジア諸国との関わりが深くなっている」ことが、新聞の具体的な経済活動の記事を通して学習できたので、生徒に授業内容をしっかりと記憶させる取り組みともなった。

生徒へのアンケート結果によれば、多くの生徒が新聞記事をまとめるにあたって関連記事を探したり、インターネット上で関連情報について調べたりしており、ひとつの事柄から波及した学習が展開できていたことがわかり、これも成果の一面として感じている。